総称して開口部であるまどは、光や空気、熱、視線の出入口でありながら人間の通りみちとしても機能し空間を生かす。
それは「音」が無ければ言葉を生みだせないことに等しく、建築空間もまた「まど」無くして生みだすことができないのだ。

人びとに隔たりが生じるいま、まどの存在価値を考える。

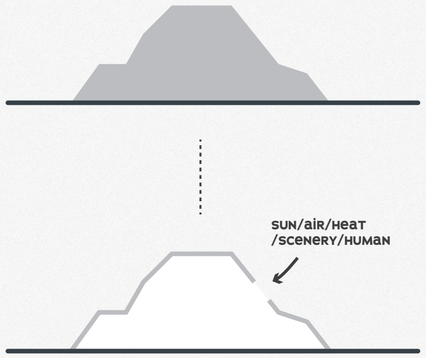
敷衍（ふえん）するまど

Amplify on window

01 まどの謂れ ｜ The so-called window

「建築をするということは、
死んだ空間を生きた空間にすること」[1)]

建造物の原初を辿れば、洞窟に起因している。その洞窟は孔を穿ち、光が差したことで、はじめて洞窟の空間として動きはじめた。現代の建造物もまた同様に、まどという開口部を設けて太陽光や空気、熱、視線、そして人間を取り込むことによって、外界の雰囲気・時の流れを感じることができている。



02 まどを定義する ｜ Define a window

「『戸は扉にあらず』、通れるところ」[2)]

我々が一般に呼称する「窓」とは、語源を辿ると「間戸」と表記されたといわれる。建築史家の木村徳国氏は「戸は扉にあらず」と提唱し「戸」はいわゆる「通れるところ」のことを指した。更に、ヨーロッパの建築様式においては石造りが主流であり「壁に穴を開ける」という考え方3)に対して、日本の建築様式は柱梁という軸組が存在することでその「間」が生まれて「通れる（＝戸）」ことから「間戸」と称された。それは人間のみならず、太陽光や空気、熱、視線も「間」を通る対象である。

本制作では、建築内部と外部、内部と内部、そして外部と外部同士を繋ぐことによって物質等を「通らせる」機能を持つ開口部すべてを「まど」と定義する。

03 無窓建造物の存在 ｜ Existence of windowless buildings

「安全で守られやすい≒要塞化しやすい」[3)]

近年の建造物は室内での快適性や安全性を求めアクティブな環境装置に固執するが故に、まどを持たず壁によって内部を覆い尽くしてしまう建造物が存在する。そうした「守られやすい」空間は、時として「要塞化」しやすく、外界との関わりが断たれることによって人体へ精神的な健康被害を及ぼす要因になりかねない。また、緊急時には外界の状況を把握しづらいことによってスムーズな避難が行えないなどの可能性が考えられる。

04 まどの修辞学 ｜ Rhetoric of the window

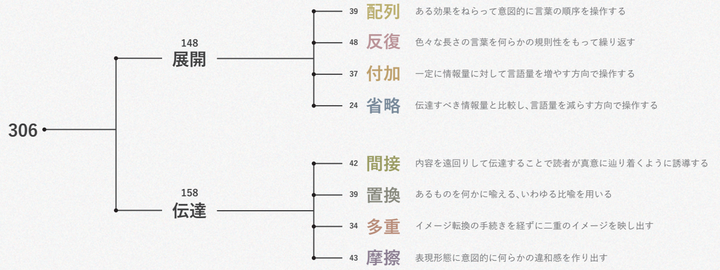
「修辞でまどを敷衍し、まどで修辞を敷衍する」

本制作では、「修辞学」という既存の学問体系を介してまどを形態化する。1次元の修辞と3次元のまどが敷衍し合い、言語化された修辞を噛み砕きながら居住環境におけるまど空間を理解することが狙いである。

05 修辞とは、なにか ｜ What is a rhetoric?

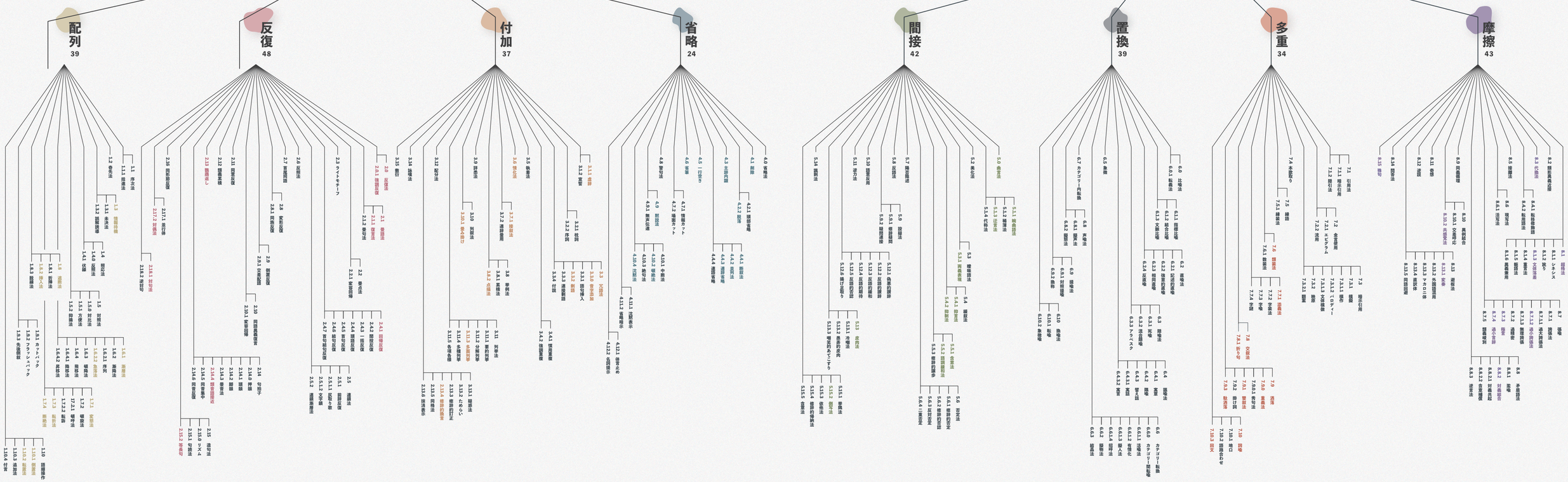
「文章やスピーチなどに、豊かな表現を与えるための技法」

修辞学の発展に際して数多くの研究者によって修辞が体系化されているが、それらの分類方法は一様ではない。その中で本制作において借用する修辞体系は、日本の国語学者である中村明氏が著者を務める「日本語の文体・レトリック辞典」[4)]の記述を基にする。
中村明氏が説くレトリック辞典によれば、現在306の修辞技法が存在し、「展開」と「伝達」の2つに大別される。



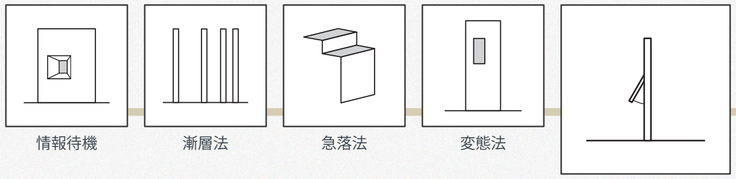
さらに「展開」は「配列」「反復」「付加」「省略」の4つ、「伝達」は「間接」「置換」「多重」「摩擦」の4つに細分され、306の修辞は8つの区分のいずれかに該当して下のように体系図化できる。

306 の修辞技法



06 修辞をつかって、まどを習作する ｜ Study windows with rhetoric

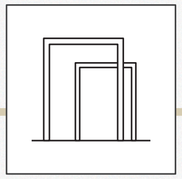
本制作では、1次元の修辞学を3次元空間へ適応可能であるとみなした71の修辞を選定し「まど」へと形態化することで下のように習作しアイコン化した。



情報待機　漸層法　急落法　変態法

転折法

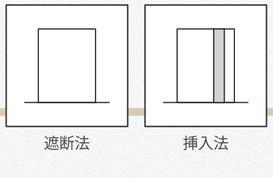
文意の流れを一転させ、別方向からの叙述に切り換える。



断絶法

挿入はおこなわず、筋や文意をとぎれとぎれに文章を運ぶ。

「…そうして、月の半分は、鈴むらさんは小よしのそばで…恋しい小よしのそばで暮した」- 久保田万太郎

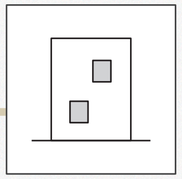


遮断法　挿入法

倒置法

述語を前に動かし、述語以外で文末部を形成する。

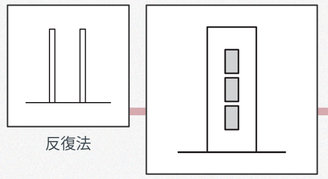
「まどを開けて、いますぐに」



転置法

ある一語を異例の位置に移して注意をひく。

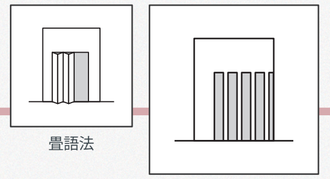
「白き鳥の、嘴と脚と赤き、鴫の大きさなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ」- 作者不詳（伊勢物語より）



反復法

強調反復

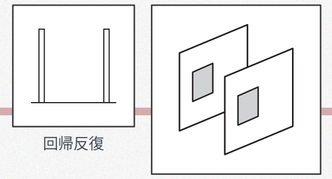
同一の行または文の中で同じことばをくりかえして強調効果をはかる。



畳語法

復言法

連続してあらわれる同一の語がそれぞれ別の句に属する。

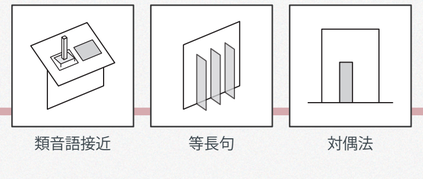


回帰反復

鸚鵡返し

前の人の発言の一部をそっくりそのままくりかえす。

「凍えるように寒かったかときけば凍えるように寒かったという」- 井伏鱒二

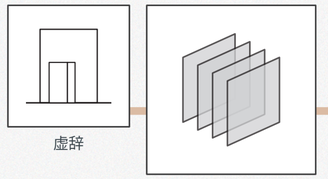


類音語接近　等長句　対偶法

対句法

対をなす同形の句の両者に、たがいに対照的な語を配して、対比を際立たせる。

「空には光がみち、谷は闇にとざされる」- 石川淳

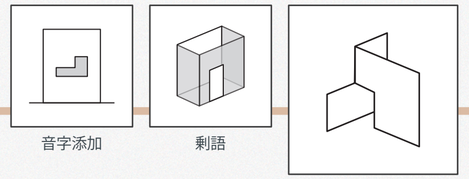


虚辞

冗語法

主として滑稽感を出すため、論理的には不必要な過剰表現をことさらくどく付け加える。

「腹を切って切腹する」

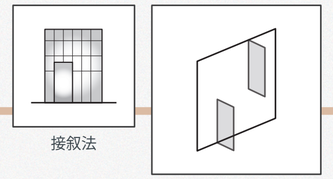


音字添加　剰語

情化法

語句の対象的意味を動かさずに、接辞の付加などによって感情的なニュアンスを添える。

「ど根性」「ぶっ叩く」「か細い」「いけ図々しい」

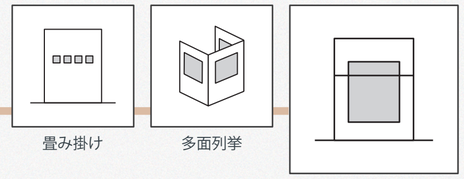


接叙法

点描法

対象のいくつかの箇所をとりあげて名詞止めの形で並べ、その非連続の集合としてイメージ化する。

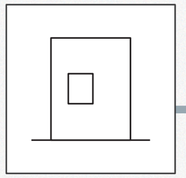
「大きな鼻、静かな口、長く延びた眉毛」- 島崎藤村



畳み掛け　多面列挙

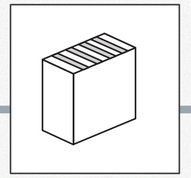
修辞的換言

修辞的目的から、角度を変えて言い直す形で表現を置き換える。



削除

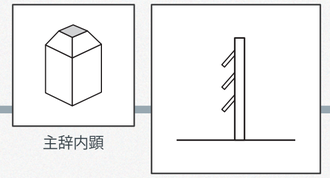
文や語句の一部を省いて簡潔にし、新鮮みを出して人目をひく。



脱落

リズムなどのつごうで助詞などを意図的に脱落させる。

「眞かずら掻きわけて細い山路、這うようにしてよじ登る」- 太宰治

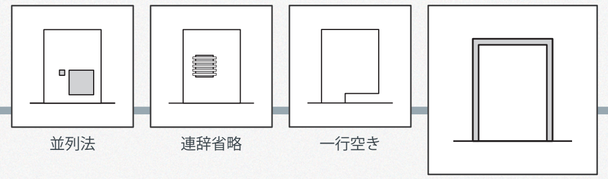


主辞内顕

断叙法

文と文との間の接続語を省き、つながりを断つ。

「一筆啓上。火の用心。おせん泣かすな。馬肥やせ」- 本多作左衛門

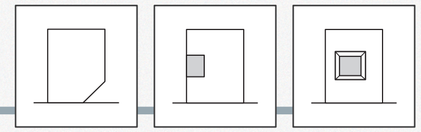


並列法　連辞省略　一行空き

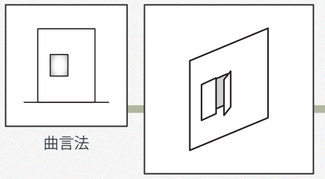
省筆

ものごとを隅ずみまで述べず、簡潔にすっきりと言語化する。

「私の額のしわは、もう深い。そして、額ばかりではない」- 尾崎一雄



黙説法　頓絶法　沈黙法

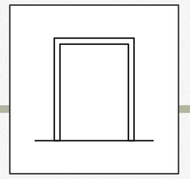


曲言法

婉曲語法

露骨な直接表現を避け、あたりさわりのない表現をとる。

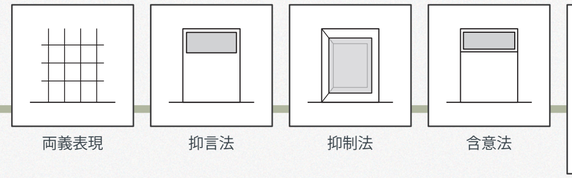
「帰らぬ人となる」「息を引き取る」「お迎えが来る」



迂言法

対象そのものを直接指示する代わりに、その属性などを述べ、それをヒントにして推察させる。

「はかばかしい答えは返ってこなかった」

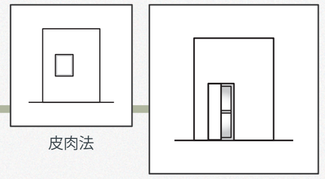


両義表現　抑言法　抑制法　含意法

語調緩和法

相手にきつく響く断定的な表現などを避け、また、文末をぼかすなどして印象をやわらげる。

「……に違いなかろう」「……とも考えられる」

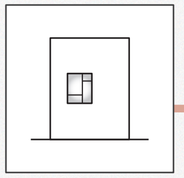


皮肉法

側写法

表現対象をその正面からでなく側面からとらえて述べる。

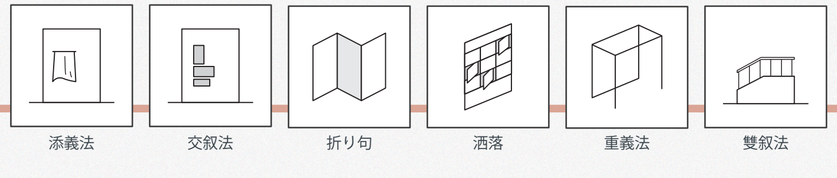
「腕の上で孝の頭が重くなった」- 井上ひさし



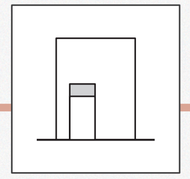
類装法

「花づくし」「貝づくし」のように、あることに関連することばを文章中にちりばめる。

「かうしたゝいてまうしといへばなぜかいはくがありさうだ」- 五十嵐力



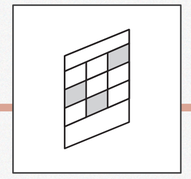
添義法　交叙法　折り句　洒落　重義法　雙叙法



駄洒落

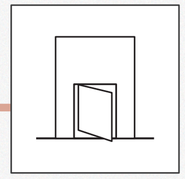
1 つの音構成に複数の意味をもたせる目的で、情報伝達としては無意味なことばを添える。

「その手はくわなの焼きはまぐり」



詞喩

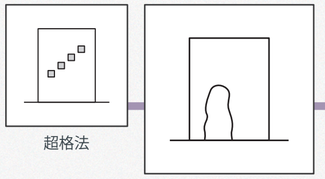
同音語など、ことばの多面性を利用してイメージの多重性を遊戯的にもたらす。



回文

前から読んでも、後ろから読んでも、まったく同じ音になるように文字を遊戯的に並べる。

「竹藪焼けた」

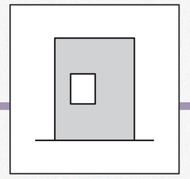


超格法

文体落差

表現様式の形態と内容とのギャップをことさら目立たせる。

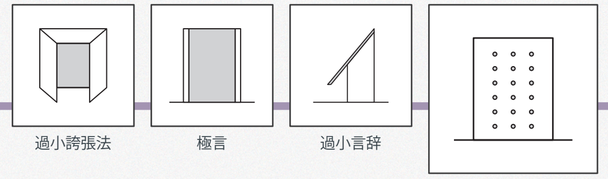
「我、たらちねの母の胎内より出でし時は、長谷川一夫も遠く及ばざる男の子にてありければ、わが母われを抱きて欣喜雀躍せりとかや」- 三遊亭歌笑



代換法

文中の二つのことばの関係を、文意や常識と逆転させる。

「大根が脚に似ている」

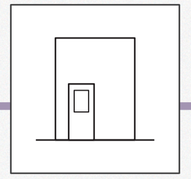


過小誇張法　極言　過小言辞

対義結合

両立しない概念どうしで修飾関係を形成する。

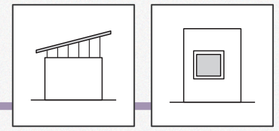
「不満足極まる満足」- 有島武郎



共感覚法

ある感覚の事象を他の感覚を借りて刺激的に描写する。

「冷たい音」「まるい味」「渋い声」

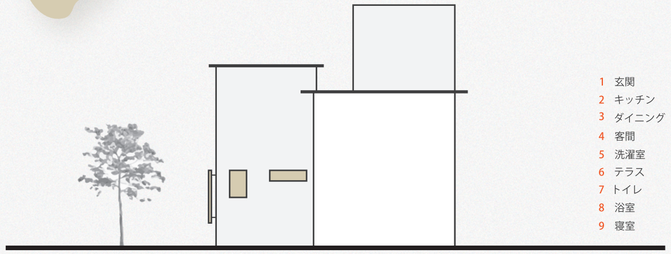


変奏　殊句

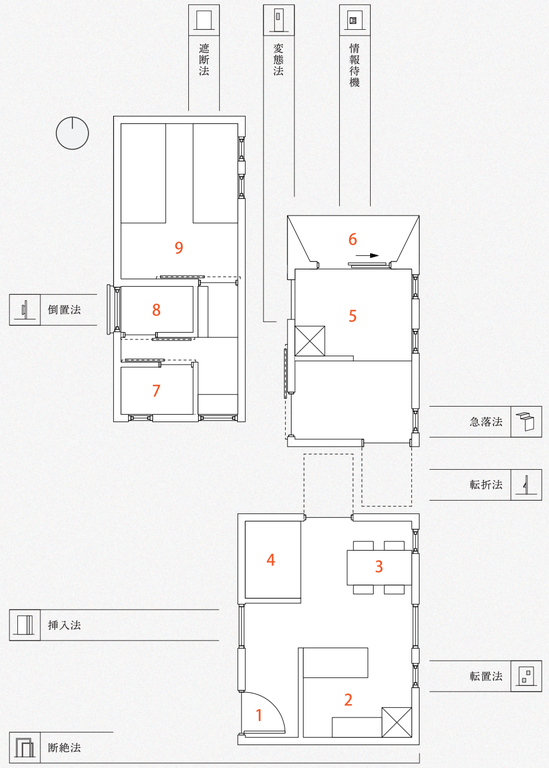
07 まど習作を集成する | Gather window studies

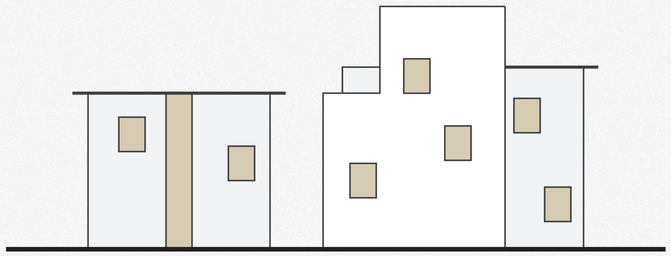
まど習作を基に、専用住宅7戸を設計した。各住戸は「置換」を除いて「配列」から「摩擦」までの7グループごとに集成。建築に応用する習作は、住宅1戸あたり凡そ8点である。

配列 arrangement

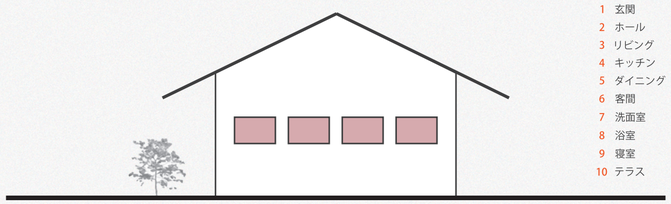


1 玄関
2 キッチン
3 ダイニング
4 客間
5 洗濯室
6 テラス
7 トイレ
8 浴室
9 寝室

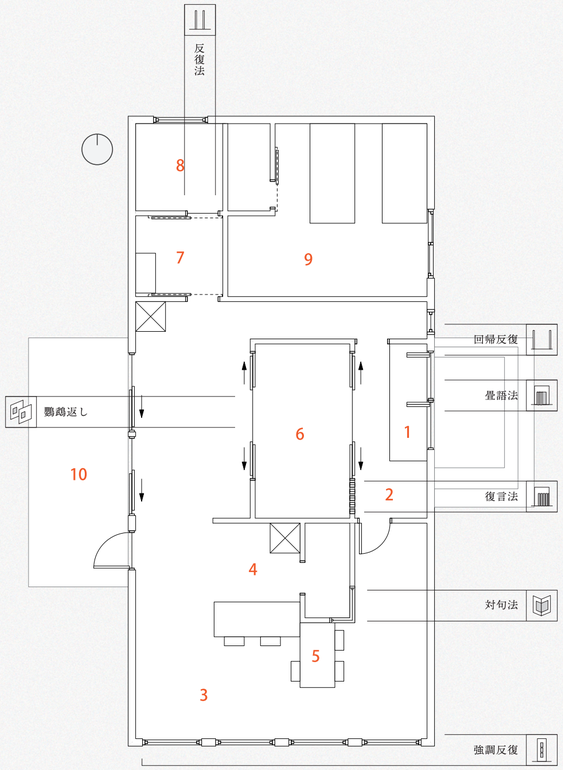


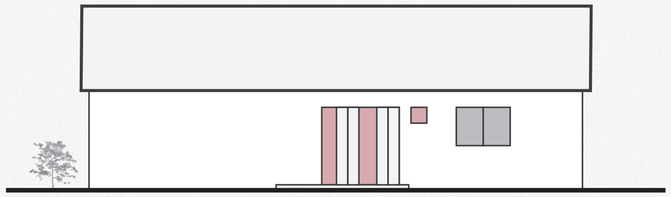


反復 Iteration

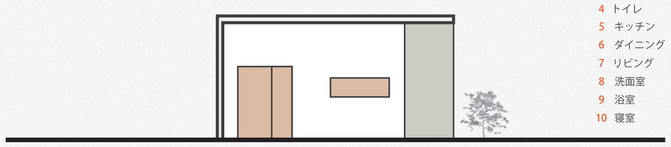


1 玄関
2 ホール
3 リビング
4 キッチン
5 ダイニング
6 客間
7 洗面室
8 浴室
9 寝室
10 テラス

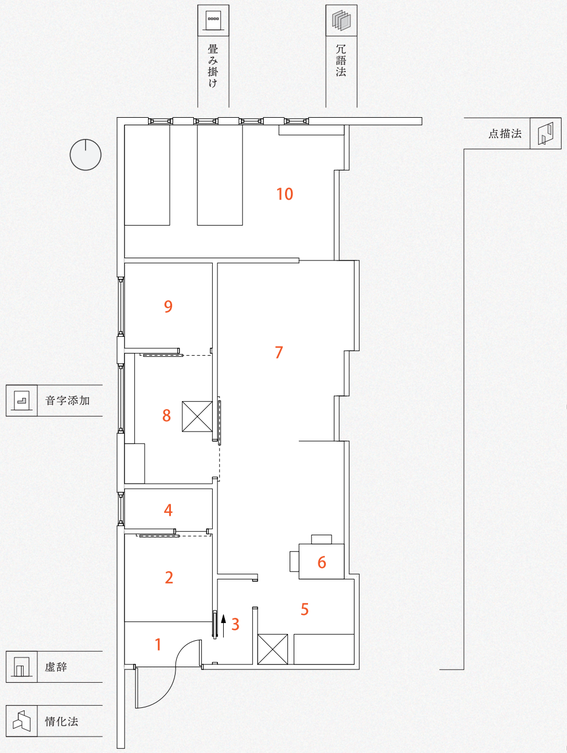


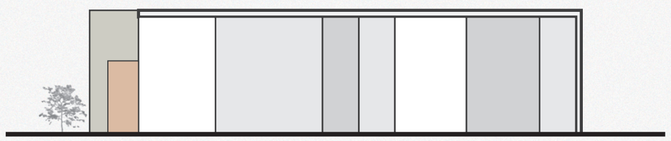


付加 Addition

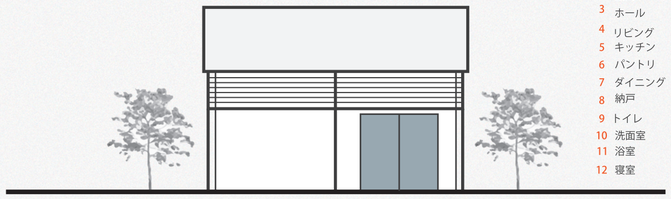


1 玄関
2 ホール
3 パントリ
4 トイレ
5 キッチン
6 ダイニング
7 リビング
8 洗面室
9 浴室
10 寝室

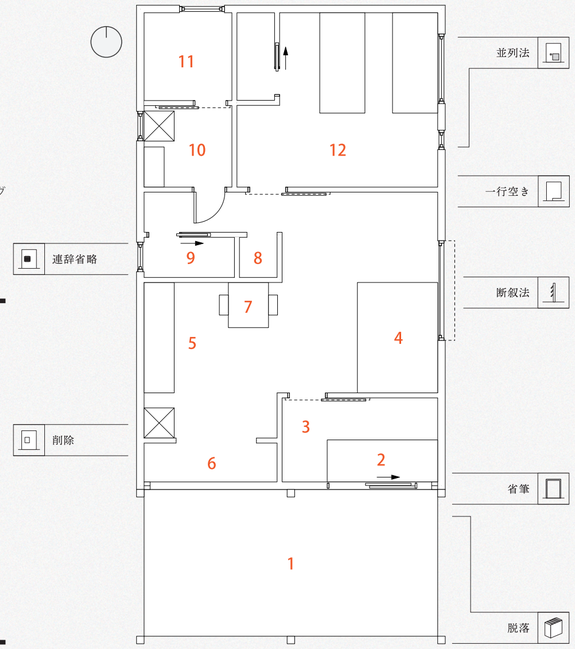


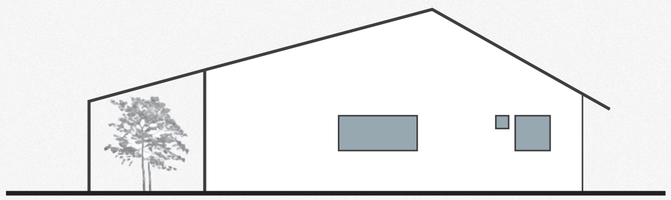


省略 omit

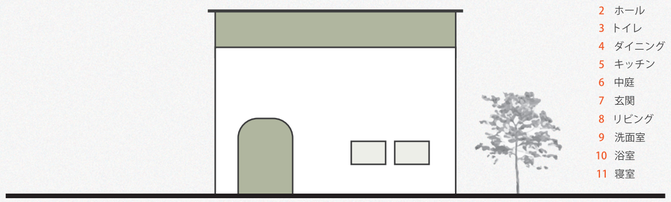


1 デッキ
2 玄関
3 ホール
4 リビング
5 キッチン
6 パントリ
7 ダイニング
8 納戸
9 トイレ
10 洗面室
11 浴室
12 寝室

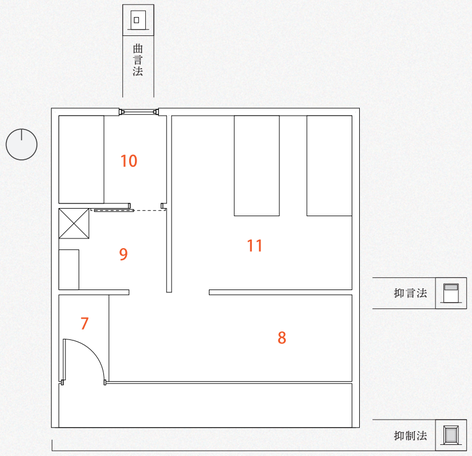


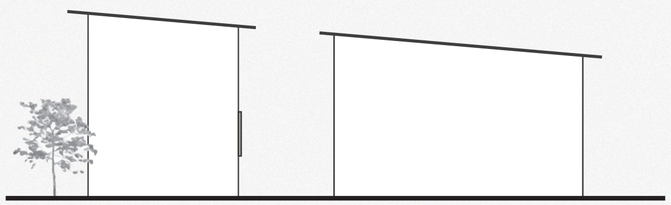


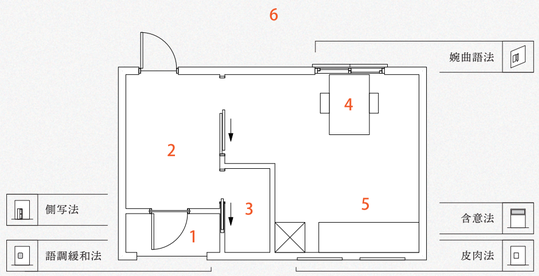
間接 indirection



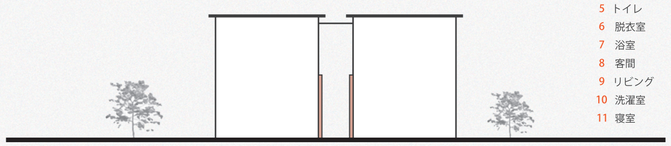
1 玄関
2 ホール
3 トイレ
4 ダイニング
5 キッチン
6 中庭
7 玄関
8 リビング
9 洗面室
10 浴室
11 寝室



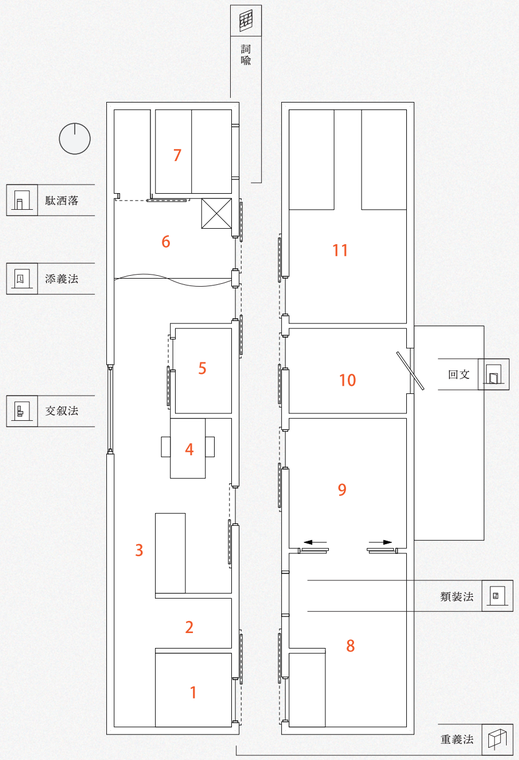




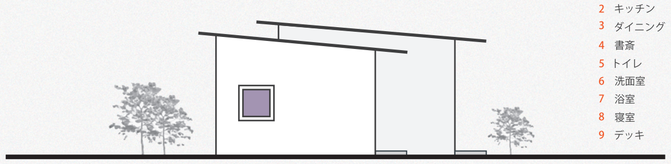
多重 Multiple



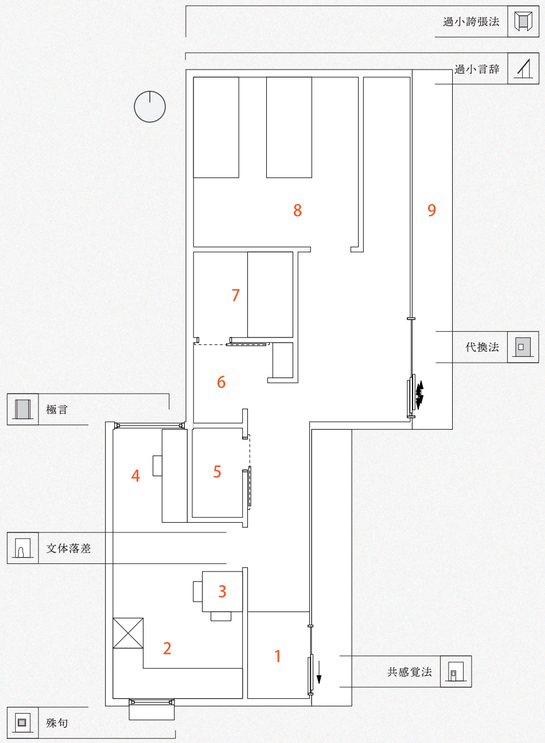
1 玄関
2 パントリ
3 キッチン
4 ダイニング
5 トイレ
6 脱衣室
7 浴室
8 客間
9 リビング
10 洗濯室
11 寝室



摩擦 friction



1 玄関
2 キッチン
3 ダイニング
4 書斎
5 トイレ
6 洗面室
7 浴室
8 寝室
9 デッキ



08 まどのない社会を創らないために | To avoid creating a windowless society

「まどが建造物や空間、そして人間に齎してくれる原初的な力」

本制作は、まどが、建造物や人間に齎す力を再認識する契機となるために修辞学を応用した推論であり、修辞学から助力を得ることによってこれほどに多様な表現形態を示した。

建築やデザインに対して関心が薄い人にとっても興味を持って頂けるよう「修辞の意味からまどのつくりを理解するのか」「まどのカタチから修辞の意味を知るのか」の思考を選択できるように工夫しながら制作を進めた。そして、設計者にとっても「まどの修辞学」というものがアイデアのヒントとなってまどの可能性が広がることに期待する。

そして、いま無窓化しやすい社会のなかで、住宅に限らず当たり前のように存在する「まど」が決して欠くべきでない存在として多面的に認識されていくことを願う。

参考文献

1)原広司 五十嵐太郎,窓の概念,公益財団法人 窓研究所
(https://madoken.jp/interviews/976/ 閲覧日:2021年11月17日)
2)内田祥哉,窓と建築ゼミナール,鹿島出版会,2017年
3)町村敬志,窓が増える社会、減る社会―変動期の「窓」問題から考える―,公益財団法人 窓研究所
(https://madoken.jp/research/window-sociology/1651/ 閲覧日:2021年11月17日)
4)中村明,日本語の文体・レトリック辞典,東京堂出版,2007年